

シリーズ ひと ～現場に生きる～ 第5回

いながき
稲垣

さやか
沙也加さん

とりがた
鳥潟

ゆきさん

札幌市

ひふみきたみち
一二三北路(株)

土木工事事務課



札幌市北区の除雪現場で作業経路を確認する稲垣さん(右)と鳥潟さん(左)

「ドボジョ」や「けんせつ小町」など、建設業の女性登用が叫ばれているものの、まだまだ女性の土木技術者は少数派です。女性技術者の採用に当たっては、これまで男性中心だった現場の中で、どのように女性と対応していくべきかという不安があると思います。札幌市北区にある一二三北路(株)では、2014年に初めて女性の土木技術者を採用し、今では力強い戦力になっています。また、昨年春には二人目の女性土木技術者が入社し、建設現場でバリバリと働いています。一二三北路の稲垣沙也加さんと鳥潟ゆきさんに会いに行ってきました。

思いを伝えられた入社前の面接

初の女性土木技術者として採用された稲垣さんは札幌工業高校を卒業し、職業訓練校などを経て、女性技術者の採用に前向きだった一二三北路に入社しました。熊谷一男社長との面接では、緊張せずに自分の思

いを伝えられたと言います。「世界で井戸を掘りたいという夢を話したら『いいね。やってみれば』とってもらえました」。

稲垣さんがこの仕事を選んだきっかけは、小学生のときに、カンボジアで井戸を掘るボランティア活動をした人が、現地の子どもを連れて学校を訪れたこと。話を聞いて、いつか自分も途上国で井戸を掘るような、人の役に立つ仕事がしたいと思ったそうです。家族や親せきに建設業が多く、大好きな6歳上の兄が建設業に従事していたことも大きな影響を与えました。「海外で井戸を掘りたいと言うと、変わり者扱いされることが多いのですが、熊谷社長は前向きに受け止めてくれました」と面接時のことを思い出します。

「女性技術者の採用はまだ先のことだと思っていました」というのは工事課長の坂下淳一さん。男性ばかりの業界の中で、どう接していくべきかという戸惑いとともに「せっかくの人材を潰してしまうのではない

か」という不安があったそうです。しかし、ちょっと男勝りなところがある稲垣さん。持ち前の根性と信念を貫きながら、辛抱強く現場に溶け込んでいきました。これまで橋梁の補修工事や道路改良、下水道工事などの現場に携わりましたが、「最初は女だからと気を遣ってくれることで、何となく気が引けて本音を言えないこともありました。でも、自然体で接していれば受け入れてくれることがだんだんとわかるようになって、今では何でも言えます」と、すっかり現場の空気に馴染んでいます。

深夜の勤務も自ら志願して

この仕事を選んだ理由を聞くと「地図に残る仕事でしたかった」と言うのは、2017年4月に入社したばかりの鳥潟さん。親せきに建設業従事者がいたことや2人の兄が工業高校を卒業したこともあり、札幌工業高校に入学。クラスでは唯一の女子生徒でした。「通学路がこの会社の前だったので、変わった名前会社だなあと感じていました。その後、親しい先輩が入社していたことを知り、女性の土木技術者の採用に前向きだと聞いて入社しました」と会社との縁を話します。

稲垣さんとの出会いは鳥潟さんが入社する前。札幌市主催の土木施設めぐり女子ツアーで稲垣さんと会い、入社前から連絡を取り合っていました。おかげで入社前の不安もなかったと言います。稲垣さんは「私は周りが男性ばかりだったので、入社から1、2年は誰にも相談できないこともありました。だから、彼女には友達のように接してほしい」と言います。その思いが伝わり、鳥潟さんも稲垣さんを頼りにしています。鳥潟さんの初めての現場は、札幌市の下水道工事。会社の配慮で同じ現場には稲垣さんも配属され、鳥潟さんの指導役になりました。

この冬は除雪現場に配属された稲垣さんと鳥潟さん。深夜の仕事もいとわず、雪が降り続けると休みが取れない現場でも、お互いに自ら志願したと言います。二人そろって「重機が大好き。除雪部隊が出勤してい

くところはめっちゃ格好よくて窓からずっと見ています」と盛り上がります。ときどき除雪車の助手席に乗らせてもらうことがあるそうですが、「今後は大型免許も取得したい。現場代理人として現場の管理をするだけでなく、重機も運転できるようになりたい」と声をそろえます。

貴重な“人財”として将来に期待

「下水道管の中など普段の生活では見えないものが見えるのが、この仕事の魅力。夢は海外で井戸を掘ることですが、まずは2級土木施工管理技士の資格を取得することが目の前の目標です。いろいろな資格を取って、稲垣がいないとだめだと言われるような人になりたい」と稲垣さん。鳥潟さんも「地域の皆さんのために役に立っていることを肌で感じられるのがこの仕事。将来はみんなに信頼される現場代理人になって、自分の名前を残せるような仕事をしていきたい」と夢を語ります。

「若いとか、女性とか、そんな小さなことにとらわれないで自分らしいものづくりができる技術者。決断力もあるので、将来は弊社の土木部長になってほしい」と稲垣さんに期待を寄せる坂下さん。札幌市の下水道工事の引き渡し検査で「現場での思い」を担当検査官に堂々と発表した鳥潟さんにも「男性技術者の前でも物おじせず、はっきり大きな声で挨拶ができる。人の心を動かすことができる技術者ではないか」と驚いたそうです。また、「男性技術者ではできない対応で、協力会社の皆さんを円滑に動かす二人の様子を見てみると勉強させられる」と新しい風を感じているようです。二人の女性技術者の存在は、今では貴重な“人財”になっていると言う坂下さん。女性ならではの視点を取り入れ、これからの建設業を変えていくような、そんな存在になってほしいと思います。



社内で熱心に打ち合わせする二人